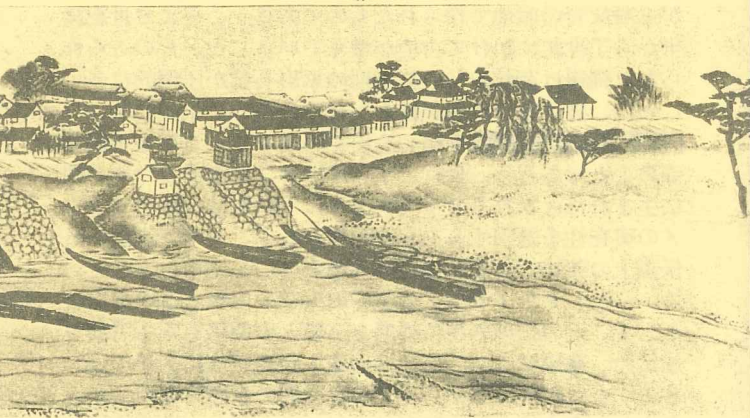


加古川市史のみどころ

かこがわ



第1巻

巻頭折り込みの「加古川市域鳥瞰図」

については別添の「年報」にその図の制作者が解説文を書いている。『加古川市史』では、本文編の各巻(第1～3巻)にこの鳥瞰図を載せ、図の上にかぶせた薄紙に、その巻に出てくる主な地名・事項等を載せて理解の便に供することにした。

第1章加古川市付近の地形と地質◆では、3800万年前からの地形の変化を考えている。とくに市域の地形の特徴をなす“いなみの台地”の生成について新見解を出したことは注目されよう。◆日岡台地の一番上の第一段丘を24万年前に形成されたものと考え、それより南西に向かって、3、4メートル程度の段差で下がっていく、幾列も並ぶ段丘(巻頭鳥瞰図薄紙参照)は、およそ3万年ごとに訪れた海進期に順次形成されたものと考えた(畠山昭三)、気候変化に関するミランコヴィッチ天文学説にもとづいて作成された過去30万年間の日射量の変動曲線—それは気候の変化、海面の変動をしめす—と対照させて“いなみの台地”にある、各列の段丘の形成時期を考えたものである。国際的な研究成果と“いなみの台地”を対応させて、きれいに対応関係を解いてみせた研究成果ということができる。

第2章先史・原史時代◆市域に関する考古学の成果である。3世紀後半から4、5世紀にかけて畿内王権の力がこの地方に及び、加古川地方は王権勢力の重要な拠点となった。日岡山古墳群・西条古墳群の存在がそれをうかがわせるが、もう一つ畿内王権のもとで播磨が占めた位置をうかがわせるものに当地竜山石で作られた長持形石棺(4、5世紀)がある。この長持形石棺は畿内地方とその近辺の有力首長のもとに運ばれ、現在各地に遺存しているが、その分布から、この石棺は、中央政権がその掌握下で竜山の石作工人たちに製作させたものとみられる。畿内王権と播磨の関係をうかがわせる格好の素材ということができる。◆この長持形石棺につづいて、6、7世紀につくられた家形石棺が遺存している。加西以南加古川下流域に160例を数え、これまた竜山石・高室石など加西—加古川—高砂市にまたがる凝灰岩の産地で作られたものである。ことに6世紀後半から7世紀にかけて古墳が増えていること、そのころ作られた縄掛け突起のない終末期の家形石棺が圧倒的に多いことは、被葬者の階層が拡大したことをうかがわせる。

第3章古代の加古川◆関心を引くのはヤマトタケルと鶴林寺のことであろう。景行天皇とイナビノオオイラツメの間に生まれたとされるヤマトタケルについては、オオイラツメの実在性を証明することがむずかしく、ヤマトタケルも伝説上の英雄であり、実在の人物とはなしえないとしている。しかしオオイラツメは全くの架空の人物とはいえないとして、その伝承の中に播磨と吉備との関係をみる考察を加えた。◆鶴林寺については白鳳・奈良時代にさかのぼらせることはむずかしいとし、平安後期の創建ではないかと考えた。◆古代の賀古駅家(かのうま)は、都と太宰府を結ぶ

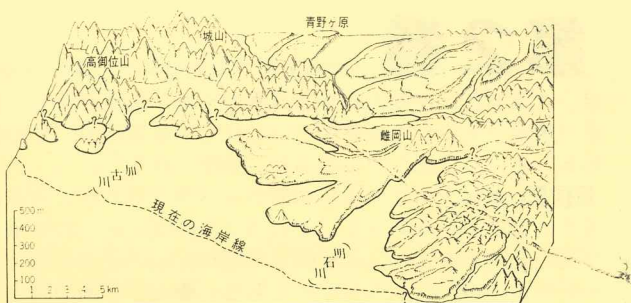


図 22 24,500年前ころの海岸線・水際線（推定）

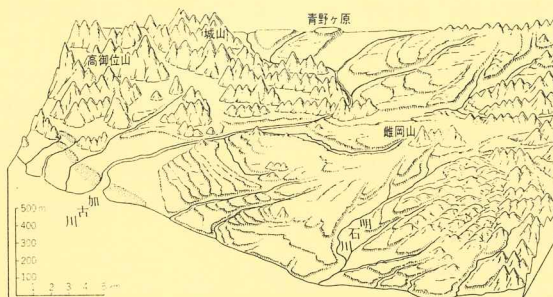


図 26 現在の地形

日本唯一の“大路”山陽道の駅家であり、しかも最大(日最大)の駅家であった。この駅家の所在地を野口町の古大内遺跡と推定した。そして山陽大路はこの遺跡の北端をかすめて一直線に通っているとした。市域では条里制がよく確認できるが、大路が通る条理地割のみは、南北に約20メートル寸法が延びており、大路が条理余剰帯として20メートル前後の幅員をもって通過していたことを推測させる。

第4章中世の加古川◆鎌倉時代の加古川についてのみ述べ、南北朝時代以降は第2巻についてのみ収めた。◆清盛の大巧田に由来する平家の巨大な荘園“五箇荘”（ごかのしょう）は加古川宿に中心をおき、東は明石西郊、西は加古川を越えて西にまたがる荘園であった。やがてこの荘園は平家没官領として播磨の守護に引きつがれ、その後も鎌倉時代を通じて、加古川は播磨の守護所として存続した、今回守護所が鎌倉時代を通じて加古川におかれていたことが初めて明らかにされた。

■本のかたち A5版、本文573頁

■別添図 加古川市遺跡分布図(1)、(2)

加古川市に遺存する条里地割の分布

■執筆者

田中眞吾	1章
置田雅昭	2章1節~3節
西谷眞治	2章4節~6節
長山泰孝	3章1節、2節1・2、3節
服部昌之	3章2節3
今里幾次	3章2節4、4節1
石田善人	3章4節2~4、第4章

第2巻

中世後半（南北朝時代以降）・近

世（江戸時代）の加古川地方の歴史を叙した巻である。各章（第四～七章）の梗概については、各章冒頭の「この章のあらまし」に記しているので、参照されたい。

第四章 ◆加古川には鎌倉初期から守護所があり、西国に通ずる街道の宿もあって、加古川は当時播磨最大の軍事・交通の要衝であった。後醍醐天皇隠岐配流のときにも守護所が天皇の宿舎となったはずである。◆元弘の勲功賞として赤松円心は五箇荘の一部賀古荘以下所々を与えられ、播磨守護職に補任された。南北朝動乱期には五箇荘を所領とし、東播にも勢力を及ぼすこととなる。しかしこのとき守護所は加古川を離れた。◆赤松義則の時代に播磨全域が赤松氏に掌握されるが、嘉吉の乱を経て中世末期赤松守護家の勢力はすっかり衰え、在地土豪が乱立した。しかし彼らはやがて赤松氏の庶流別所氏の勢力下に組み込まれた。天正6年(1578)別

図1 中道子山城縄張り図



(山上雅弘・多田鶴久作図)

第五章 ◆加古川地方では、野口・神吉・志方の諸城も落ちた。秀吉の播磨平定は天正8年(1580)に完了した。ひとり加古川城の加須屋武則のみは生き残り、豊臣時代には1万2000石を領するまでになるが、彼も関ヶ原の戦いに西軍に属したため、徐封となってしまった。◆関ヶ原の戦い後、播磨一国52万石の大名として池田輝政が姫路に入った。彼の行なった最大の事業は、姫路築城、城下町建設であったが、それを達成するため、入部早々 村々に対して行なった年貢増徴のための二割打出し政策が注目される。二割打出しについては、近世以来、検地によって打ち出されたといわれて来たが、実はそれは、検地といった手続を踏まず、何ら生産力の上昇もないのに、机上計算で強引に打出しをはかったものである。戦国武将的荒々しさがまだ近世初頭に残っていたことがうかがえる。◆慶長国絵図にはまだ一村の記載もない、一面の原野であった印南野に、17世紀前期入植が始まり、後期に新田開発が本格化し、新村が族生する。その開発の前提として溜池の造成、用水路の掘削がなされ、讃岐に次ぐ溜池地帯となった。◆加古川舟運の開始は、播磨・摂津の奥地や日本海側との商品流通を進展させた。加古川(當時は今の加古川)下流 曾根から、大塩・的形・木場方面にかけての地に、古式入浜につづいて、量産的な入浜塩田ができ、全国にさきがけて塩の量産が始まった

のも、大坂市場の需要のほか、加古川舟運による日本海側の需要があったからこそである。

第六章 ◆これまで姫路藩領の寛延一揆は、滑甚兵衛の義民伝承を筋書きとして取り上げられて来たが、滑甚兵衛の活動は夢前川中流域 前之庄組村々内にとどまる。大一揆は加古郡西条組大庄屋の打ち潰しに始まり、全藩領に広がって、加古・印南郡の海岸部や山陽道沿いの打ち潰しで終わる。この間に、地域的、段階的にさまざまな特色をもった一揆が継起した。いままでの義民伝承による寛延一揆観は、大きく変えられるべきである。◆加古川地方を領有した姫路藩が作らせた元文・寛保期、寛延・宝暦期の村明細帳がある。それによって、18世紀初めまでは、まだ顕著でなかった商業的農業、商品生産が18世紀前期に盛んとなったことが知られる。とくに18世紀中期までに綿作が進展し、加古・印南地方は長束木綿(ながくもめん)の特産地となった。繰綿屋・木綿商人の多さが目立っている。◆山陽道沿い村々や(加古川の支流美嚢川の舟運の展開とともに)国包村に農村商人や職人・日雇いなど非農業人口が多くなり、とくに宿場町加古川は繁栄した。加古川の町場は地域文化の中心となった。俳諧では栗本青蘿とその一門の活動が、別府の滝瓢水の活動とともに注目される。

第七章 ◆加古川地方最大の商品生産たる長束木綿は姫路藩の専売制の対象となり江戸積みを強制された。これに対して地元の長束問屋たちは、藩に尺幅不足の木綿の大坂積みを認めさせる。それを足がかりにして、やがて、禁じられていた規格幅木綿の大坂への積出しを藩に認めさせるに至る。規格木綿の江戸積みを前提として成立していた藩の専売制をしだいに後退させ変容させていく様子がたどられる。◆天保4年(1833)の加古川川筋大一揆は領主や村役人に対する攻撃ではなく、豪商・豪農に対する不満が爆発したものである。多くの領主が支配している地域にわたって広がった一揆で(姫路藩領だけの、そして村役人を攻撃の対象とした)寛延大一揆とは性格を異にし、時代の変化をうかがわせる。このころ豪農商層の蓄積した資本によって市域の海岸一帯に、岩崎新田・千代新田・金沢新田が開発されたことも時代の推移を反映している。

■本のかたち A5版、本文689頁

■執筆者	八木哲浩	5章1~5節、6章2節1・2、3節5の一部、7章2節
	石田善人	4章
	今井修平	5章6節、6章1・2節3、7章3・4節
	村田修三	4章4節2の一部
	富田志津子	6章3節
	西向宏介	7章1節

第3巻

最終の巻となる本文編Ⅲは全10章約900頁にまとめ上げられ、1998年度刊行予定です。第6巻上・下に対応する本文編です。

■目次

第一章 近代の幕開けと加古川

- 第一節 地方自治制の変遷と村政
- 第二節 地租改正の実施
- 第三節 小学校の設立と学校経営
- 第四節 徴兵制の施行
- 第五節 町と農村の変貌

第二章 日清・日露戦争と加古川

- 第一節 町村制の施行と日清戦争
- 第二節 産業革命の影響と産業の発展
- 第三節 日露戦争期の加古川
- 第四節 日露戦後の社会

第三章 第一次大戦期の加古川

- 第一節 新たな時代の到来
- 第二節 第一次世界大戦と加古川
- 第三節 農村の動向と米騒動
- 第四節 台地の開発と水利

第四章 大正から昭和へ

- 第一節 第一次大戦後の社会
- 第二節 諸運動の発展
- 第三節 国民統合への試みと抑圧
- 第四節 変貌する加古川地域

第五章 満州事変と加古川

- 第一節 大恐慌とその影響
- 第二節 満州事変のインパクト
- 第三節 準戦時体制下の加古川
- 第四節 加古川と水問題

第六章 日中全面戦争の中で

第一節 全面戦争と銃後

第二節 大戦争の影響

第三節 新体制運動

第七章 太平洋戦争下の加古川地域

第一節 翼賛体制と対米英開戦

第二節 大戦争遂行の中で

第三節 食糧問題と農村

第四節 「経済戦」への組織化

第五節 敗戦への道

第八章 戦後諸改革と加古川市の成立

第一節 敗戦後の加古川地域

第二節 民主化の進展

第三節 戦後新教育の展開

第四節 加古川市の成立

第九章 高度経済成長期の加古川

第一節 市域の拡大と産業基盤の整備

第二節 工場誘致の背景と波紋

第三節 押し寄せる都市化の波

第十章 新たな都市づくりへの模索

第一節 産業都市から総合文化都市へ

第二節 近未来の加古川市

■執筆者

須崎愼一

小西正雄

小林和美

森本真一

棚橋久美子

西向宏介

杠 立夫

第4巻

この第四巻は、第一巻（地理・地質、考古、古代、中世 本文編）に対応する史料編である。

第一章（加古川市の自然） この章の叙述の成果は、別袋に収めた「加古川市とその周辺の地形・地質図」以下4枚の図（ほかに土地利用図・平地土壌図・植生図）に凝縮されている。◆なかでも「地形・地質図」はすぐれた成果である。この図によって加古川の東方“いなみの台地”をみると、海岸線に平行して、ほぼ均等な幅の、20近い段丘が、内陸に向かって列状をなして並んでいる。各段丘は3、4mの段差で区切られ、東北に向かってせり上がっていく形である。これまでの地形図と比べて、格段に精細な、このような段丘地形図が描かれたことは特筆すべき市史の成果である。◆この図にみられる段丘地形ができたことには、二つの要因があった。①加古川地方の大地は30~40万年にわたって、加古川付近で年間0.125mm、明石川付近で0.25mmの割りりで、東北に向かうほど大きい隆起をつづけている。そして②これと同じく30~40万年の間に、ミランコヴィッチの天文学説がいうように、2万年周期で氷期・間氷期が繰り返され、間氷期（海進期）に、列状地形が汀線付近に形成されたことがもう一つの要因となって、上述したように、30~40万年の間に、東北にいくほど成立の古い、高い位置の段丘が列状に並ぶことになったのである。◆気候の変化に関するミランコヴィッチの学説を、日本の地形に初めて適用し、“いなみの台地”の段丘の形成要因、形成年代を確定的なものにしたこと、地形・地質図として視角的に表現提示した点は高く評価されてよい業績であるといえる。◆市域には24の土壌統が分類され、各土壌統ごとに特性等が詳しく述べられている。付図3はこの土壌統を基本に作成されている。◆市域の植生は暖かさの指数から照葉樹林帯に属しているが、人間の影響を強く受けて、自然植生は極めて少ない。

第二章（加古川市の考古遺跡と遺物） 市域には旧石器時代から歴史時代にいたる多くの考古遺跡・遺物があるが、なかでも畿内王権の力がこの地方に及んだ3世紀後半以降に築造された、日岡山古墳群・西条古墳群・平荘湖古墳群をはじめとする古墳時代の遺跡・遺物は市域に豊富で、古墳関係の個別報告が本章の圧巻である。◆発刊直前に発掘された行者塚古墳については墳丘実測図や以前の出土品を中心とし、今回の成果についてはごく簡単な報告にとどめた。◆竜山石で作られた4、5世紀の長持形石棺、6世紀後半から7世紀にかけて作られた家形石棺の分布についての叙述は注目されよう。加古川市域にある大型古墳（日岡山・西条古墳群……）に、竜山石で作られた長持形石棺が納められている可能性は高いが、未確認であり、知られる限りでは、市域の竜山石製の石棺は家形石棺に限られている。しかし竜山石製長持形石棺は畿内とその近辺の主要な首長層の大型古墳に納められた石棺の主流をなし、多数遺存している。また竜山石製家形石棺にも、二上山石製をし

のいで畿内その他広い地域に遺存している。この事実によって、中央政権がその掌握下で竜山の石作り工人たちに長持形、家形石棺を製作させたとみられ、畿内王権と播磨－加古川地方との関係をうかがわせるものである。

第三章（古代） この章に収めた古代史料では、直接加古川市域のことを伝える史料はさほど多くはない。加古・印南両郡の貢献物を記した平城宮跡出土の木簡や、古代日本唯一の大路、古代山陽道にある播磨の9つの駅家(うきや)のうちでも最大の駅家であった賀古駅家の史料など、わずかながら加古川固有の史料がある。◆その他は古代の支配一般の状況を伝える播磨関係の行政史料である。なお、理解し易くするため、多くの注を付して解説したことは特色の一つである。

第四章（中世） 鶴林寺文書・報恩寺文書を家わけで収載したほか、一般編年文書を収めている。◆清盛の大功田に由来する平家の巨大な荘園“五箇荘(ごかしょう)”は鎌倉時代には没官領となって守護に引き継がれ、この荘の中心加古川宿は守護所となった。室町時代にはこの荘は在地土豪に押領された。◆一般編年文書の項は、この五箇荘－賀古荘関係の史料が中心となっている。◆加古川の中世といえば鶴林寺文書オンリーで済ます考えがこれまでであったが、その通念を破ることを心掛け、葛川明王院文書・青蓮院文書その他から五箇荘－賀古荘関係の史料を収録して充実することができた。

■本のかたち A5版、本文644頁（横書き439頁）

■別添図

1. 加古川市とその周辺の地形・地質図
2. 加古川市とその周辺の土地利用図
3. 加古川市とその周辺の平地土壌図
4. 加古川市とその周辺の現存植生図

■執筆者

後藤博彌 1章 10-部
田中眞吾 1章 10-部、2
門野行男 1章 3
杉田隆三 1章 4
置田雅昭 2章 2と30-部
西谷眞治 2章 30-部
今里幾次 2章 40-部
長山泰孝 3章
石田善人 4章

■考古部門分担執筆者

有本雅己 太田三喜
岡本一士 小田木治太郎
桑原久男 高野政昭
竹谷俊夫 日野 宏
森内秀造 山内紀嗣
山田郁子 山田清朝
山本裕作

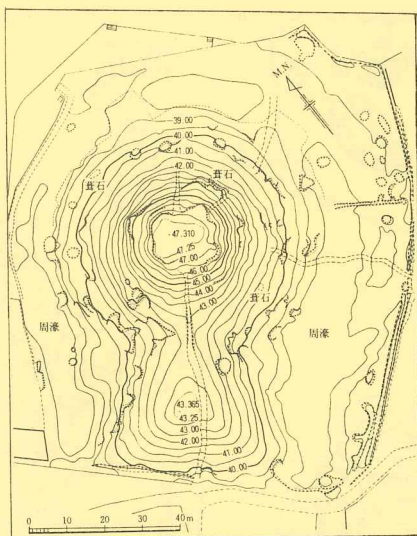


図 124 行者塚古墳 墳丘測量図

第5巻

この史料編2は、近世(江戸時代)の史料を集めたもので、室開設以来、市内外での調査・収集活動によって100余カ所から集められた貴重な史料は資料目録集17冊にまとめ上げられた。それらの中から選定された史料が717頁の中に凝縮されている。

特色を上げると次のとおりである。

第1章 市域には近世の村数にして139カ村があり、その約43パーセントにあたる60カ村の村明細帳(発刊後2カ村追加発見)を270頁にわたって載せている。紙幅の都合上、一村一冊(一年)に限定して載せたが、加古川村のような宿場町、溜め池地帯の村、新田開発の進んだ村などいろいろ特色が出ている。また全体を通じて、土産・植付け等の項に木綿生産の記述がみられる村の多いことが注目される。

第2章 加古川市域は播磨地方でも綿作が最も早く且つ盛んとなり、18世紀前期には最良質のの播州木綿=長束(ながそく)木綿の特産地を形成するまでになった。このことは村明細帳の記載にも現れているが、この特産品たる木綿に対しては、この地域の領主姫路藩・一橋徳川氏(廻轉)がともに専売制をしき、姫路藩のごときは、その加工工程(篠巻=しのまき、総糸=かいと)についても統制を加えた。◆主としてこの流通に対する統制関係の史料を載せている。この史料に出てくる村々の名を拾って見ても、加古川地方一帯で綿作・木綿の生産が広く盛んであったことがうかがえる。

第3章 村明細帳とならんで、14点にもおよぶ村絵図

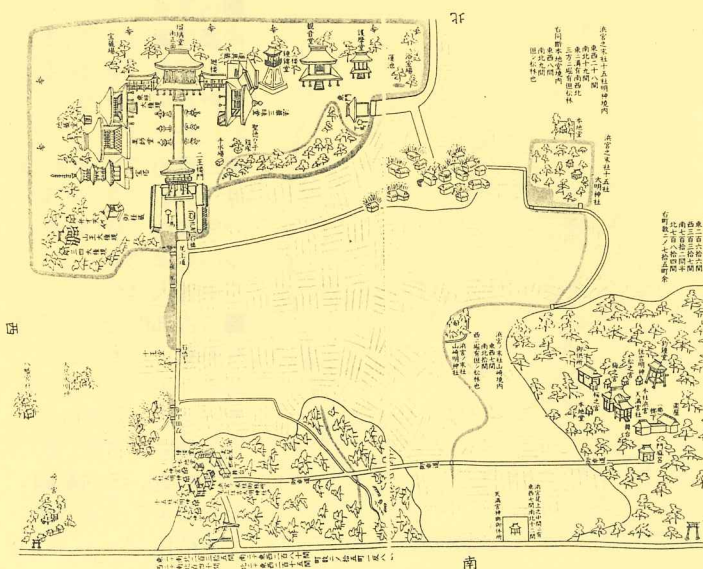
63 国包村・舟町村絵図

64 中西条・下西条村境界争論裁許絵図

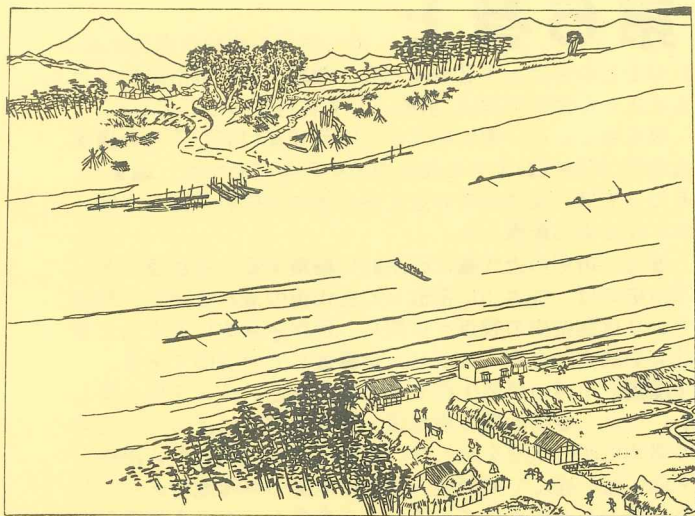
68 新野辺村金沢新田絵図

70 浜宮・鶴林寺・尾上神社絵図 など

その他、用水・宿場・山論関係絵図など、22点を解説



浜宮・鶴林寺・尾上神社絵図(部分) 寛文2年



加古川宿と渡し「十二景詩歌」より

図とともに載せた。◆宿場としての加古川村・寺家町、主商品として米を川下げし塩を奥地へ運ぶ加古川舟運(高瀬舟)の史料を載せた。

第4章 加古川左岸(東)の市域のほとんど、播磨町域の田畑を灌漑する大きな用水路(用水組合)に五ヶ井(新井も含む)がある。この五ヶ井はその名がしめすとおり、庄・郷という行政単位が行われていた中世からの古い五ヶ庄(郷)にわたる用水路である。◆それとともに溜め池地帯の池水をめぐる問題や志方地区においては山の境界争いの史料などが豊富に載せている。

第5章 市域西条村の大庄屋を攻撃することからはじまった寛延2年(1749)の大一揆の経緯を語る史料のうち市域に関する部分を67頁にわたり詳しく掲載した。

別袋 正保(1646)と元禄(1702)の播磨国絵図(市域部分)を載せ、文字がわかるように元禄の国絵図については解説図を付した。

※ 市域のほとんどは姫路藩領であり、一部東志方地区に幕府領があった。幕府領は一時小田原藩大久保氏領となり、さらにその後一橋徳川氏領となった。

■本のかたち A5版、本文717頁

■別添図 正保播磨国絵図(部分)
元禄播磨国絵図(部分)
元禄播磨国絵図 解説図(部分)

■執筆者	八木哲浩	第1章～第3章
		第4章3
		絵図解説図
	今井修平	第4章1、2
		第5章、第6章

第6巻上

近・現代の史料が豊富にあったのでこの巻は上下2分冊とし、「榊原報」、「平岡 中野村評議録」など、まとまった個別史料は、別冊として刊行することにした。

第6巻上には、明治初年から昭和12年(1937)7月の盧溝橋事件(日中戦争の発端)までの70年間の史料を収めたが、編集にあたっては、加古川市の近代史の流れが史料を通して明らかになるよう配慮した。

普通、市史の近代編は政治的に編集することが多いが、本市史では、加古川に密着して近代史の流れを追い、政治史よりは民衆史の視点を重視し、民衆生活史に光を当てる社会史的方法をとった点が、全編通じての特徴である。

第1章 市域の農業生産や産業の実態と、その発展を明らかにした。◆明治期の物産表・物産取調書によって明治期の農業生産の状況を示した。市域は近世(江戸時代)から綿作一本綿生産が盛んで播磨地方随一の木綿の特産地であったが、第5巻のあとをうけて、この在来産業としての木綿織の近代における発展の様子をたどっている。織物同業組合やとくに稲岡商店(志方の稲岡工業齋)を取り上げている。

第2章 農村の運動、農民運動を時代を追って取り上げた。◆①地方改良運動・民力涵養運動・産業組合運動・経済厚生運動等の農村の運動、②自作農創設・地主会・昭和初期の激しかった小作争議と農民組合運動などの農民の運動、③青年団、修養団系流汗党、婦人会等の活動を示す史料を収めている。

第3章 加古川地方における近代産業の代表、多木製肥所と日本毛織齋を取り上げ、激しい労働運動を採録◆両社の創立、早期の労働組合の組織化、激しい労働運動を紹介している。労使間の闘いの激しさは、戦後のそれもおよばない。印象的な史料である。

第4章 地方に関係の深い鉄道・学校の史料◆①加古川線・高砂線の前身 播州鉄道と多木の別府鉄道の創設、②加古郡立女学校の開校、多木中学校の校舎・敷地の寄付を受けて実現した県立農学校の明石から別府への移転、加古川中学校の創設等を取り上げている。

第5章 軍事的史料 ◆徴兵制、日清・日露戦争時の軍隊列車の送迎・献納・軍事演習・軍人宿泊・出征兵士の手紙・戦争と町村行財政、第一次世界大戦と加古川、満州事変、軍国ムード、加古川飛行場等を取り上げている。

第6章 水の問題 ◆普通 市史近代編で水の問題を取り上げることは少ないが、本市史では近世につづく五ヶ井用水や雁戸井の水利組合、大池用水争論、その他治水・水害史料を載せている。

■本のかたち 6巻上 A5版、本文838頁、

執筆者	山下直登	1章、2章
	須崎愼一	2章 2・60-部、3章 1~4 4章 1~4、5章 1~3
	小西正雄	2章 30-部、3章 1・30-部 4章 40-部、5章 2・30-部

第6巻下

市域程度の狭い地域の限ら

れた史料で日本近代の歴史の流れを全体的、全時期にわたってとらえることは、なかなかむずかしい。ところが加古川市域では、継続して近代史料が豊富に残っていたため、6巻上に引き続いて、地域史料で日本史の流れがつかめる、特色ある史料編が生まれた。『市史』に挟んである「年報」4でも、茨城大学の東敏雄教授がそのことに触れられている。

今回の『市史』は昭和12年(1937)の盧溝橋事件勃発(中戦争の端)以降の史料を収めている。戦時中のさまざまな史料にうかがえる国民の考え方や行動は、若い方が読まれると、本当にこんなことがあったのか、こんなことを皆が考えていたのかと、とても信じられない驚きを感じられることであろう。戦中・戦後を体験した人々は隔世の感をもって感慨深く読まれることであろう。

第6・7章 戦争とファッション化の中での教育の変化の様子を「加古川小学校式日訓話記録」で描き出した。◆貯蓄、金属回収、疎開などを中心に、戦争下の加古川地域の人々の姿をとりあげた。◆「農民倶楽部」で村のリアルな姿や、新体制運動を下から支える動きを明らかにした。◆日中全面戦争による生々しい動員の様子や、産業報国会の実態を明らかにした。

第8章 敗戦後の混乱から公職追放、さらには戦後の新しい地方自治の展開を村政面から明らかにした。◆従来あまり自治体史では焦点のあてられていなかった、海外からの引揚げ者の史料を系統的に取り上げた。◆戦後の経済民主化政策の柱であった農地改革の具体的な実施過程を明らかにした。◆戦後10年間の庶民生活の動向を衣食住の各側面から明らかにした。◆加古川小学校の教育に関する史料が特徴的である。

第9・10章 加古川市の成立を、終戦直後の「大播磨市構想」から続く流れの中で捉えた。経済成長の波の中で揺れ動く市域の苦悩を如実にしめす史料を多く掲載した。

■本のかたち 6巻下 A5版、本文868頁

■執筆者	須崎愼一	6章 1~4、7章 1~5 8章 1・5の一部
	山下直登	8章 1~6
	小西正雄	6章 2・4の一部、7章 1・2・3・4・5の一部 8章 2・3・4・5・6の一部 9章 1~3、10章 1~3

第7巻

第1回目の配本である別編1は、市域に残る窯跡・建築・彫刻・絵画・工芸・石造美術・民俗などの文化遺産について記述している。

1章 窯跡◆市域の須恵器窯跡群については、出土遺物の実測図をつかいながら考察を加え、野村、野新村、白沢、野尻、札馬、投松窯跡群などが取り上げられている。

2章 建築◆全国的にも数少ない平安後期建築がある鶴林寺を中心に、鎌倉以後のものが多い神社建築も取り上げた。また、日本毛織株式会社加古川工場旧事務所などの明治建築も載せている。

3章 彫刻・絵画・工芸◆美術史的に価値の高い作品を数多く残す鶴林寺を中心に、市内の各寺院の主な仏像など40点を調査、載せている。絵画では、昭和51年に赤外線写真撮影により明らかになり、重要文化財に指定された太子堂壁画がある。

4章 石造美術◆筆者により37項目に分類された遺品のうち、市域には12項目が存在する。良質の産石地にめぐまれ、中世の石造美術の宝庫である。113件にのぼる遺品は、3カ年にわたり詳細に調査され、写真・拓本に記録された。中世の紀年名のある遺品43件の一覧表がついている。

5章 民俗◆年中行事・方言は昭和50年代に教育委員会により調査された資料と、筆者が戦前・戦後を通じて行った調査資料をもとに、執筆された。播磨は「お頭(とう)の地区」といわれるように市域に今も続いているものもある。◆わらべ歌 明治・大正・昭和初期のものを中心に編集し、曲譜(158編)・歌詞(250編)にまとめた。

■本のかたち A5版、本文773頁
別添図 加古川市主要文化遺産分布図

■執筆者	中村 浩	1章 窯跡
	近藤 豊	2章 建築
	東郷松郎	3章 彫刻・絵画・工芸
	田岡香逸	4章 石造美術
	玉岡松一郎	5章1、2、4 年中行事・方言
	地主 喬	5章3 人生儀礼
	山本眞一	5章5 わらべ歌



拓影 3 福田寺の正和2年十三重塔(塔身)

